

「カントと「真正な生」」発表要旨

三谷 尚澄

価値に関する「多元主義」が、現代の倫理学・政治哲学を特徴付けるキーワードになって久しい。一部の偏狭な政治的イデオロギーや原理主義的宗教集団、あるいは議論を円滑に進める目的で過度に単純化された価値一元主義のカリカチュアを除いては、広い意味における多元性の承認ないし擁護に正面からの異議申し立てを行なう論者はほとんど存在しないように思われる。つまり、「多元主義の横行」に「価値であればなんでもよし」とする相対主義の危険をかぎとり、「普遍の再生」を主張する論者でさえ、「多元的な諸価値の並存」という目標自体の妥当性に疑念をさしはさむことは少ないように思われるのである。全人類（ないしは「全理性的存在者」）に共通する、一定の普遍的規範の存在を主張する立場　その思想的代表としてカントの名前を挙げることができるだろう　と、特定の歴史的・文化的集団に相対的な個別的価値の重要性を強調する立場　おそらくはアリストテレスをその代表とすることができるだろう　を総合する、という課題について、両者の総合は望ましい事態であるし、そしてまた決して不可能な企てではない、という理解が一般に広く共有されるようになってきた、ということであろう。

とはいえ、もちろん、「多元主義」の承認なり擁護を唱える論者たちの間で、「多元主義」が何を意味するのかについて理解が共有されているとか、ましてや「価値の多元化」という現実を支えるメタ理論のあり方に関して、一枚岩の統一見解が成立しているわけでは決してない。「価値の多元性」一般を支持する諸見解の間に、「偏狭な一元的普遍主義ではない」という消極的な特徴づけをこえた共通の枠組みを見出すことは難しいように思われるし、いくつかの主要な論点に関しては互いに対立する諸見解が乱立している、とするのが冷静な現状認識であろう。本稿では、そのような（広い意味での）多元主義内部での見解の対立の一例として、価値に関する「合理主義」と「表現主義」とでも名づけうる、二つの互いに対立する価値理解のあり方を取り上げ、双方の見解の紹介と検討を試みる。

詳論は後に回すとして、本稿で検討される「価値」に関する二つの理解について、まずは簡単なスケッチを行なっておくことにしよう。まず、価値に関する「合理主義 rationalism」とは、文字通り、多様な価値の経験に先行する「価値の合理的規準」を設定し、それらの

規準に合致するか、のテストをクリアした価値・規範にのみ「正当性 legitimacy」を認めようとする立場を意味する。後に詳しくみるように、その哲学的代表としてカント（ならびに現代のカント主義者たち）や功利主義者たちの理論を挙げることができるだろう。カントやミルの名前と共に、「合理主義」の思想は近代のリベラル・デモクラシーを支える正統理論としての地位を一貫して認められてきたといえるし、その意味で現代に生きる我々の価値理解のあり方に関する一つのパラダイム・ケースをなしているともいえるだろう。

一方で、価値に関する「表現主義 expressivism」の理論が論争の中心点として大きな注目を集めることは比較的少なかったように思われる。さしあたり、チャールズ・テイラーやロバート・ブランダムなど、ヘーゲルの強い影響下に「表現主義」の現代的再生を試みる思想家の論考を参照するなら、「表現主義」とは、我々が日常的に、かつ暗黙のうちに (implicitly) 使用したり引き受けたりしている評価的ボキャブラリーや日常的コミットメントについて、明晰に語りうることはあくまで語るようにつとめる立場のこと、つまり普遍的な客観知ではなく、蓋然的なものに関わる（いわばリベラル・アーツの伝統につながるアド・ホミネムな）観点から価値に関する言及を行なおうとする立場を意味している。

以上の簡単な特徴づけからも容易に推察されるように、現代における両者間の論争は、近代における哲学・倫理学説の正統たる合理主義の見解を、正統に対するオルターナティブとしての表現主義理論が批判する、という形で行なわれることが多かった。本稿もまた、そのような論争史の流れに従い、「表現主義」による「合理主義」の批判がどのようなものであったのか、という点についての分析から考察をスタートさせることにしたい。そして、さしあたりの出発点として、アメリカの文芸批評家ライオネル・トリリングの論考を通じて、近代的自我の行き詰まりを浮き彫りにする問題として広範囲に影響を及ぼすことになった「真正さ authenticity」ないし「真正な自己 authentic self」という概念を取り上げてみることにしたい。近代合理主義の正統なる嫡子にして鬼子となりつつある「誠実な自己」の崩壊と再生を見据えるトリリングの見解に注目することから、「合理主義」と「表現主義」双方の見解を検討しようとする本稿の目論見に有効な見通しを得ることができそうに思われるからである。また、話を先取りしておくなら、チャールズ・テイラーやバーナード・ウィリアムズなど合理主義的見解の優越に疑念を抱く現代の思想家たちもまた、「自由な選択の主体」という「合理主義的な自己の理解 rationalistic conception of the self」を批判する文脈で「真正な自己」についての注目すべき考察を行なっており、「人間の行為主体性」や「実践理性」の構造を「価値」という観点から再検討しようとする本稿の意図からしても、トリリングの考察に注目することには十分な意味があるように判断される。